

日本雑草学会学術研究部会 外来植物モニタリング研究部会 シンポジウム
地域フロラ研究と外来植物の侵入・管理の最前線—東海地域を舞台に—

日時：2021年10月23日（土）13:00～16:00

場所：Zoomによるオンライン開催

参加費：無料（事前申し込みが必要です。）

申し込み：10月20日（水）までに下記の入力フォームよりご入力ください。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSf75QtqN8I6f5Me6dkNU2YbTjymI13aPY1aSGc2TioHmRTb4g/viewform>

【趣旨】

外来植物の早期発見、監視には植物分類学と地域フロラの厚い蓄積が不可欠です。また、防除計画の策定と実践、検証には対象種の生活史と動態の解明が必須です。外来植物モニタリング研究会では、外来植物の継続的な監視と迅速な対応の支援に向け、国内各地域の地域植物誌研究者と雑草研究者との情報共有・連携関係の構築を目的とし、研究会を開催しています。本シンポジウムでは東海地域を拠点に地域フロラ研究で活躍する研究者に、人為攪乱環境における外来植物の動向と管理取り組みの最前線について、幅広く話題提供していただきます。

【プログラム】

趣旨説明：13:00～13:05

浅井元朗（農研機構植物防疫研究部門）

講演1：13:05～13:45

稗田真也（豊橋市自然史博物館）・野間直彦（滋賀県立大学環境科学部）・中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）・上河原献二（滋賀県立大学環境科学部）

「特定外来生物オオバナミズキンバイの生物学的特性・駆除・管理制度について」

講演2：13:45～14:25

瀧崎吉伸（豊橋市立東部中学校／愛知植物の会）

「愛知県における外来種の状況・・・とくに国内初記録の種のことなど」

講演3：14:35～15:15

藤井伸二（人間環境大学人間環境学部）

「外来雑草？在来雑草？もしかしたら新種？」

講演4：15:15～15:55

芹沢俊介（愛知教育大学名誉教授／愛知みどりの会）

「ありふれた植物の中にも新種がある」

オーガナイザー：早川宗志（ふじのくに地球環境史ミュージアム）・浅井元朗（農研機構植防研）・嶺田拓也（農研機構 農村工学研究部門）・下野嘉子（京都大学）

【講演内容】

1. 特定外来生物オオバナミズキンバイの生物学的特性・駆除・管理制度について

稗田真也（豊橋市自然史博物館）・野間直彦（滋賀県立大学環境科学部）・中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）・上河原献二（滋賀県立大学環境科学部）

生物学的特性：特定外来生物オオバナミズキンバイは南米原産の抽水植物である。種内には、亜種オオバナミズキンバイ（6倍体）と亜種ウスゲオオバナミズキンバイ（10倍体）が知られる。琵琶湖に侵入した集団は、形態と染色体数から亜種ウスゲオオバナミズキンバイであることが明らかになった。植物体は、形態可塑性により琵琶湖岸の水中から陸上にかけて繁茂し、茎の断片や葉の1枚にも再生能力を有する。花はハナバチ類が送粉し、セイヨウミツバチとの間には外来種が別の外来種の侵入を促進する現象である侵入メルトダウンが発生している。泥中で保存した種子は高い発芽率を示す。水鳥の糞中に発芽能力を維持した種子が含まれていることが明らかになったため、分布水域外への侵入にも注意が必要である。

駆除：琵琶湖では、2007年もしくは2009年に南湖東岸の赤野井湾周辺で侵入が確認された。急速に分布範囲と生育面積を拡大したことから、2012年に最初の駆除作業がボランティアベースで始まり、2013年には内湖「小津袋」（湖岸堤の内陸側の止水域）で県事業としての駆除が始まった。生育規模が膨大になってきたことから、2014年度には県が事務局を務める協議会事業と環境省近畿地方環境事務所による、機械駆除を含めた本格的な駆除事業が始まった。一旦は駆除後の大規模リバウンドを経験したが、このことを教訓として、2016年度以降は、機械駆除の際にも人力駆除を併用してできるだけ取り残しをしないこと、および駆除実施後の地域では定期的に巡回を行い再生を防ぐことを基本方針とした。その結果、2016年度には30万㎡に及ぶ最大生育面積を記録しながら、同年度末以降、3期連続して年度末残存面積を縮減させ、2019年度以降は、大規模な繁茂を未然に防ぎながら低密度管理を続けている。今後は、石組み護岸やヨシ植栽地など駆除困難な区域における防除を適切に行うための手法の実装が課題であり、効果的な手法の確立をめざした防草シートの利用などの野外実験等にも着手している。

制度比較：英国（イングランド及びウェールズ）では1998年の野外初確認以降2020年までに43カ所でオオバナミズキンバイが確認された。それらの内16ヶ所では対策の結果、局地根絶に成功し、それ以外の箇所についても全て管理が行われている。英国政府は、隣国フランスでの深刻な状況を参照しつつ、2010年にオオバナミズキンバイの根絶を目標とし、環境庁を調整機関として指名した行動計画を発表した。また、英国政府は、侵略的外来植物に関して、「土地所有者責任」を法制度上発達させてきた。初期の野外確認報告・公表では、植物学協会所属の地域の植物記録者たちが貢献した。早期防除のために、国の明確な指導力の発揮、管理者責任の確立、地域の植物研究者・愛好家たちとの組織的連携が必要である。

2. 愛知県における外来種の状況・・・とくに国内初記録の種のことなど

瀧崎吉伸（豊橋市立東部中学校／愛知植物の会）

特定外来生物のヒガタアシやミズヒマワリは愛知県で国内初記録された植物です。これら 2 種の発見の経緯や、ヒガタアシ根絶への対応について、お話ししたいと思います。ヒガタアシについては、侵略的外来種が水際ではほぼ防除できた種として、他に例を見ないものと思います。COP10 招致にまつわる愛知県の外来種検討会と時期が重なり、マスコミに注目されたことが発端となり、大変運良く防除が進められた例です。

また、ハビコリハコベやオワリセンダングサ、ポンポンアザミ、ヒメケヌカキビなど、愛知県で国内初記録された帰化植物たちを紹介します。これらの種は他地域でもすでに侵入して分布を広げている可能性があります。

3. 外来雑草？在来雑草？もしかしたら新種？

藤井伸二（人間環境大学人間環境学部）

植物相が比較的良好に研究されている日本において未知の雑草が見いだされた場合、それらの多くは外来植物であり新種であるケースは稀である。しかし、ヨーロッパ原産の外来雑草と考えられていたコタネツケバナは、近年になって在来の新分類群コカイタネツケバナとして認識されることになった。外来か在来かを明らかにすることは分類学的研究を進める際の基本事項なのだが、攪乱環境に依存する雑草性の植物ではこれが容易ではない。この発表では、水田雑草として知られるアズマツメクサとその近縁種、近年減少が著しい水生植物のセキショウモとその近縁種、氾濫原環境に依存するコカイタネツケバナ（コタネツケバナ）の認知を例に、これらの雑草の実体に迫った研究を紹介する。

4. ありふれた植物の中にも新種がある

芹沢俊介（愛知教育大学名誉教授／愛知みどりの会）

日本列島の維管束植物フロアは、残念ながらまだ多くの未解明な問題を抱えている。日本の山を 1 日歩いたら、よほど注意していても、新種として記載すべき植物の 1 株や 2 株はついつい蹴倒し、踏みつけてしまう。もちろんその中には形態的識別が微妙で、新しい分子生物学的手法を使わなければよく認識できないというものもある。しかし、言われてみれば誰でも容易に識別できるようなものが眠っていることも多い。今回はオニタビラコ、キンミズヒキ、ミゾソバなどを例に、そのような新種を紹介する。帰化植物の侵略性を問題にしても、侵略される側の多様性は意外にわかっていない。